

⑭ 特定非営利活動法人ディー・コレクティブ

防 災 教 育 チ ャ レ ン ジ フ ラ ン 最 終 報 告 書

記 入 日 2011年1月25日

1. 概 要

| | | | |
|----------------|------------------------------------|-----------------------|----|
| 実践団体名 | 特定非営利活動法人ディー・コレクティブ | | |
| 連絡先 | 090-8617-4604 (千川原【ちがはら】) | | |
| プランタイトル | たすけあい防災カレッジ in 宮城・山形～小学生のための福祉防災教育 | | |
| プランの対象者 | 小学校高学年・大学生・ 社会人・一般 | 対象とする 災害種別 | 地震 |

【プランの目的・ここがポイント!】

発災確実視の宮城県沖地震。宮城・山形では、地域の核家族化・高齢化により、人と人とのつながりの希薄化が進み、災害時要援護者対策の推進にあたり大きな課題となっています。一方、その当事者ともされる子ども達にとって、「災害時には自分たちは守られるだけではなく、助け合える・支え合える力を持っているという潜在性に気付き、自信を持つ機会が必要」と考えました。この事業を通し、大人達も関わりながら、「自助・災害への備え」「共助のあり方」「災害時要援護者対策」等について気付き、実践へつなげる場作りとしても位置づけていきます。事業実施にあたっては、宮城・山形の社会福祉協議会・行政・NPO・企業との連携を通して、より実践的な内容・ネットワーク形成に結び付けていきます。

【プランの概要】

小学校高学年を主な対象とした「たすけあい防災カレッジ」を開催。災害時要援護者について・災害時の助け合いの大切さ・宮城県沖地震への備えの大切さを、クイズ・ゲーム・体験学習を通して楽しく・わかりやすく伝えていきます。

会場では、身近に当事者がいる可能性の高い、障がい者・高齢者・アレルギー・ペットの4つのブースを用意。ブースをまわりながらクイズブック「たすけあいのしおり」を解いていきます。

【期待される効果・ここがおすすめ!】

1. 参加者である子どもたちを通して、大人に対しても「災害時要援護者」の存在とその課題・対応法の周知を行う
2. 共助の精神（思いやり・助け合い）・福祉的視点からの心の育成、防災への理解促進
3. 宮城県沖地震に備えて、県境を越えたつながり・支え合いが必要であることの周知
4. 次世代の防災リーダー育成の一環
(スタッフの一員である大学生、参加者である小学生含む)

防災教育チャレンジプラン 最終報告書

2. プランの年間活動記録

| | プランの立案と調整 | 準備活動 | 実践活動 |
|--------------------|---|--|--|
| 2010年 4月～ 7月 | <ul style="list-style-type: none"> 企画立案 両県各種防災イベント参加（ネットワーク形成・取り組み取材） | <ul style="list-style-type: none"> 両県スタッフミーティング：企画立案（4月13日、5月12日、5月18日） NPO 法人ドリーム・ゲートに企画相談（5月27日） | |
| 2010年 8月 | | <ul style="list-style-type: none"> 両県スタッフミーティング：企画立案（8月5日） | |
| 2010年 9月 | | <ul style="list-style-type: none"> 両県スタッフミーティング：プログラム固め（9月20日） | |
| 2010年 10月 | <ul style="list-style-type: none"> 中間報告会：方向性の再確認、企画の練り直し | <ul style="list-style-type: none"> 講師依頼 講師打ち合わせ①（10月7日） | |
| 2010年 11月 | <ul style="list-style-type: none"> プレイベントとしてのトークサロン企画 たすけあい防災カレッジ、プログラム決定 | <ul style="list-style-type: none"> 企画書まとめ 会場確保 山形市社会福祉協議会との連携体制構築 | |
| 2010年 12月 | <ul style="list-style-type: none"> 内容に基づいた講師との企画調整 クイズブック「たすけあいのしおり」作成に向けた聞き取り調査 | <ul style="list-style-type: none"> 講師依頼、広報（トークサロン） 講師打ち合わせ②（12月27日） 広報活動開始 後援依頼（宮城・山形） | <p>【プレイベント】</p> <p>クリスマストークサロン 「障がい児・者福祉施設の防災対策～取り組みを考えよう」（12月23日）</p> |
| 2011年 1月 | <ul style="list-style-type: none"> 「たすけあいのしおり」クイズ項目作成・講師との最終調整 ブースやゲームについての最終企画調整 | <ul style="list-style-type: none"> 講師打ち合わせ③（1月2日） 広報活動 教材作成 報告書作成 | <p>「たすけあい防災カレッジ～せまる宮城県沖地震！『共助』のパワーでのりこえよう！」（1月15日）</p> |
| 2011年 2月 | <ul style="list-style-type: none"> 報告書配布による取り組みの周知 | <ul style="list-style-type: none"> 報告書作成 配布先リストアップ | <ul style="list-style-type: none"> 報告書作成、関係機関へ配布 第3回やまがた市民活動まつりにて活動紹介、資料展示・配布（2月27日） |

防災教育チャレンジプラン 最終報告書

3. 実践したプランの内容と成果

【実践プログラム①】

| | |
|-----------------------|--|
| タイトル | クリスマストークサロン 「障がい児・者福祉施設の防災対策～取り組みを考えよう」 |
| 実施月日（曜日） | 2010年12月23日（木・祝） |
| 実施場所 | 天童市総合福祉センター |
| 担当者または講師 | 担当者・講師等の区分：外部講師（ゲストトーク） 氏 名：藤井 俱子 氏 所属・役職等：NPO法人のびのび会 ワークポケット 理事長 |
| 所要時間または「コマ数×単位時間」 | 2時間（ゲストトーク1時間、フリートーク1時間） |
| プログラムのカテゴリ、形式 | 2 講習会・学習会・ワークショップ |
| 活動目的 | 3 災害に強い地域をつくる 8 防災意識を高める |
| 達成目標 | ※「たすけあい防災カレッジ」のイベントとして開催。 積極的に防災対策に取り組む障がい児福祉施設の方をお招きし、山形の災害時要援護者対策の実情や、地域で災害時要援護者を支えるポイント、また支えあうことの大切さを、参加者とともに考える。 |
| 実践方法・進め方（箇条書き、またはフロー） | ～当日プログラム～ ○ゲストトーク テーマ「県内障がい児福祉施設における防災対策の現状」 講師の藤井様より、施設で行っている防災訓練・防災対策の内容について・取り組みを通して思うこと・大切にしていることなどお話を伺う。 ○トークサロン 参加者の皆様と自由に意見を交わしながら、福祉施設における防災対策の現状と今後を考えていく。 |
| 準備、使用したもの・人材・道具、材料等 | ○講師：1名 ○スタッフ：4名（当団体） ○会場準備：天童市総合福祉センター（山形市から車で30分） ○準備物：パソコン、プロジェクター、アンケート 等 |
| 参加人数 | 13名（参加者8名、スタッフ4名、講師1名） |
| 経費の総額・内訳概要 | 約15,000円（講師謝金、会場使用費等） |

防災教育チャレンジプラン 最終報告書

| | |
|---|--|
| <p style="text-align: center;">成果と課題</p> | <p>【成果】</p> <p>○当日、講師と参加者とのやりとりの中から、『福祉施設・災害時要援護者の防災対策』について、以下のような4つのキーワードが現れた。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、イベントありきにしない 2、施設や組織のリーダーに防災意識をもってもらう仕掛けを作る 3、地域とのつながりをつくる 4、行政の現状理解を得ながら、協力体制を構築する <p>特に「地域とのつながりをつくる」については、本番の「たすけあい防災カレッジ」においても、各講師陣から重要なポイントとして提言があった。</p> <p>○学生から社会福祉協議会、商店主まで、多様な年齢・業種間の交流・意見交換ができた。</p> <p>○当日お越しいただいた方の中には、「たすけあい防災カレッジ」の際、会場提供・共催団体としてご協力いただいた（社福）山形市社会福祉協議会の方や、講師としてご協力いただいた山形県障がい者スポーツ協会の方もいらっしゃった。ご感想として、災害時要援護者対策の必要性や、地域のつながりの大切さを改めて感じた、とのお声をいただいている。このサロンの開催を通して、より良い協力体制を築くことができた。</p> <p>○サロンの開催を通して、我々スタッフも山形の防災・福祉の現状について考えることができたこと、内容を「たすけあい防災カレッジ」の講師陣にお伝えできたことで、スタッフ・講師陣のカレッジ開催に向けた良いウォーミングアップになった。</p> <p>【課題】</p> <p>○イベント開催時期の設定</p> <p>福祉施設の方にもお越しいただきたかったが、年末・クリスマス直前ということもあり、参加に結びつけることができなかった。しかし興味・関心をもってくくださった方は非常に多く、「施設のイベントと併せて開催すればいいのでは」といった具体的なアドバイスもいただいている。</p> <p>○参加者とのネットワークの構築</p> <p>様々な立場の方にお越しいただき、「つながりが大切」というご意見を多くいただいた。このつながりを今後具体的に活かすための仕掛けを、考えていく必要がある。現行案として、講座に来てくださった方向けの「防災情報ML」を設置するなどが挙げられている。</p> |
| | <p>成果物</p> |

防災教育チャレンジプラン 最終報告書

【実践プログラム②】

| | |
|-----------------------|---|
| タイトル | たすけあい防災カレッジ ～せまる宮城県沖地震！『共助』のパワーでのりこえよう！ |
| 実施月日（曜日） | 2011年1月15日（土） |
| 実施場所 | 山形市総合福祉センター |
| 担当者または講師 | 担当者・講師等の区分：外部講師 氏名：NPO 法人ドリーム・ゲート NPO 法人エークューブ 有限会社ヘルシーハット NPO 法人災害救助犬ネットワーク 山形県障がい者スポーツ協会 NPO 法人にいがた災害ボランティアネットワーク |
| 所要時間または「コマ数×単位時間」 | 3.5時間 |
| プログラムのカテゴリ、形式 | 1 イベント・行事 |
| 活動目的 | 1 遊び・楽しみながらの防災 6 防災に関する知識を深める 8 防災意識を高める |
| 達成目標 | 1. 参加者である子どもたちを通して、大人に対しても「災害時要援護者」の存在とその課題・対応法の周知を行う 2. 共助の精神（思いやり・助け合い）・福祉的視点からの心の育成、防災への理解促進 3. 宮城県沖地震に備えて、県境を越えたつながり・支え合いが必要であることの周知 4. 次世代の防災リーダー育成の一環 （スタッフの一員である大学生、参加者である小学生含む） |
| 実践方法・進め方（箇条書き、またはフロー） | ～当日プログラム～ ① 開会あいさつ（10分） ② 【自助】地震について知ろう（30分） ・地震の起こるしくみ ・宮城県沖地震について ③ 【共助】災害発生！皆で助け合おう（100分） ・「共助」とは？ ・ブース毎全体ガイダンス ・ブースラリー：障がい者・高齢者・アレルギー・ペットの4ブースを設置。ブースを回り、資料やお話、体験学習を通して知識をつけ、クイズブック「たすけあいのしおり」を解いていく。 ・たすけあいゲーム ④ 災害救助犬デモンストレーション（30分） |

防災教育チャレンジプラン 最終報告書

| | |
|--|---|
| | <p>災害救助犬の取り組みを紹介、災害時における多様な支援方法を伝える</p> <p>⑤ まとめ（20分）</p> |
| <p>準備、使用したもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人材 ・道具、材料等 | <p>○講師：6団体16名</p> <p>○大学生ボランティア：2名</p> <p>○スタッフ：5名（当団体）</p> <p>○会場：山形市総合福祉センター（山形駅から徒歩10分）</p> <p>○教材（当団体）：たすけあいのしおり、アレルギー関連資料</p> <p>○教材（講師）：各テーマに基づく資料、ツール等</p> |
| 参加人数 | 59名（子ども19名、保護者7名、一般10名、講師16名、当団体スタッフ5名、大学生ボランティア2名） |
| 経費の総額・内訳概要 | 約14万円（講師謝金、印刷費、消耗品等） |
| 成果と課題 | <p>【成果】</p> <p>○福祉防災教育プログラム・教材の開発・実施：講師陣をはじめ、様々な方のご協力を得ながら、プログラムとしてまとめ、教材を作成することができた。今後も改良を加えながら、より効果的かつ実践的な内容へとステップアップを図りつつ、様々な対象に向けての活用を考えていきたい。</p> <p>○山形において、開催事例を作れたこと：これまで大きな災害がなく、防災への関心が低い山形で、このような子ども向け防災イベントを主催できたことがまず大きな一歩である。山形は災害について考える機会がそもそも少ない。広報時は苦勞したが、趣旨を丁寧にご説明すると理解・共感を示してくださる方は多かった。考えるきっかけを作ることが大切である。また、これまでに大きな災害がなかったために下地としての防災への興味・関心が低いということ、子ども向けということから、「楽しみながら学べる」という要素は必要不可欠と思われた。当日プログラム内容だけでなく、広報の段階から、その要素を前面に押し出す必要性を感じた。</p> <p>○コミュニケーションが大切であることの再確認：災害時に手助けが必要な当事者に対し、手助けの方法を知っていることも大切であるが、当事者や周囲の大人とコミュニケーションをとることがまず大切である。コミュニケーション力が低下しているといわれる現代、その力を育てることが人と人とのつながりを生み、共助の力を育て、地域防災にもつながっていく。このことは、ブースを担当して下さった各講師陣からも挙がっている。</p> |

防災教育チャレンジラン 最終報告書

○当事者やその支援者が声をあげる、地域に関わることの大切さ：子どもたちが当事者を「特別な人」としてとらえてしまうことのないよう、今回の講師陣のような、直接的・同目線の関わりの機会をつくるのが大切。参加者アンケートからも、その効果を読み取ることができる。当事者を「助けられる存在」としてみるだけではなく、互いにできることは補い合う。子どもたちも含め、助けられる人から、助け合える関係の構築へ。

○山形県内における、宮城県沖地震についての普及・啓発：山形の子どもたちは、自らも被災する可能性があるにも関わらず、「宮城県沖地震」という言葉すら知らされていない。これは、「これまで地震で大きな被害を受けたことがないから大丈夫」「山形は地盤が固いから大丈夫」といった、周囲の大人たちの危機感の低さが引き起こしていると考えられる。今回、宮城からは4名の参加者（子ども・大人各2名）にお越しいただき、プログラムの中では、前回の宮城県沖地震の際に小学生だった方のお話を伺うことができた。山形の子どもたちにとっては、宮城からの参加者との交流によって、「この人たちが被災するかもしれない」という気持ちを引き起こし、自分と同じ年代で被災した人の話を聞くことで、よりリアリティが増す。これは、約30年の周期で定期的に発生している地震であるからそのアプローチ方法と考えられる。今後は、前回の地震で被災された方の声を集めるなどの、事業の広がりも感じることができた。

○多様な連携・つながりの構築：今回の開催にあたり、事前の準備期間も含め、宮城・山形両県の社会福祉協議会、行政、NPOなど、多様な機関・団体との関わり・つながりを作ることができた。イベントの終了でつながりが切れることのないよう、情報交換、勉強会の開催、教材の共同開発、新たなつながりの構築など、今後のより具体的な関係性につなげていきたい。

【課題】

※当初のエントリーシートと比較して、変更の入った部分もある。今後（来年度）に向けての課題。

※継続の大切さ：今回は、まず参加してもらい、興味をもってもらい、という「きっかけづくり」に主眼をおいた。一つの実績を作った今、今後、どのように継続・発展させていくかがポイントである。

○宮城での開催：当初は宮城と山形で一度ずつの開催を予定していたが、中間報告会でいただいたアドバイスをもとに、企画と方向性の練り直しを行った。その結果、宮城・山形の参加者（講師陣含む）の直接的な交流により、「連携」の意味をより効果的に伝えることができると考え、今回は山形で開催し、宮城からの参加者を招く、という形で開催することとなった。

防災教育チャレンジプラン 最終報告書

| | |
|------------|---|
| | <p>来年度は、宮城県での開催の可能性をはかっていきたい。</p> <p>○プログラムの応用：今回のプログラムを基本的な枠組みとして、内容の改編を行い当団体スタッフのみで開催できるような形にし、パッケージ化することにより、取り組みやすさや継続・普及につなげていきたい。</p> <p>○対象の拡大：今回は子どもを主な対象として行ったが、上記のようなプログラムの応用により、幼稚園～大人まで、対象の拡大を目指す。</p> <p>○「子ども向け」のコツ：広報段階においてはチラシの内容、当日においてはプログラムの進行において、いかに子どもの興味を引き続けるかが大きな課題となった。楽しく親しみやすく行うためのノウハウやコツを学んでいきたい。また、参加保護者から、小学校やPTA と連携しながら、授業や学校行事として行ってはどうかのご意見をいただいた。</p> |
| 成果物 | <p>福祉防災教育プログラム、クイズブック「たすけあいのしおり」、前回の宮城県沖地震被災者の声、参加者の声、報告書 等</p> |

防災教育チャレンジプラン 最終報告書

【実践プログラム③】

| | |
|-----------------------------|---|
| タイトル | 「たすけあい防災カレッジ～せまる宮城県沖地震！『共助』のパワーでのりこえよう！」報告書の作成・配布【予定】 |
| 実施月日（曜日） | 2011年2月 |
| 実施場所 | 山形県・宮城県 |
| 担当者または講師 | 担当者・講師等の区分：担当者 氏 名：当団体スタッフ（1名） 所属・役職等：防災コーディネーター |
| 所要時間または「コマ数×単位時間」 | |
| プログラムのカテゴリ、形式 | 17 その他（活動紹介） |
| 活動目的 | 6 防災に関する知識を深める 8 防災意識を高める |
| 達成目標 | 活動の報告書を山形・宮城の社会福祉協議会、行政、NPO等に配布。福祉教育と連携した新しい防災教育へのアプローチの提案、宮城県沖地震への備えの大切さについて、広く普及をはかる。 |
| 実践方法・進め方（箇条書き、またはフロー） | 活動報告書を作成、当日資料（成果物）等とともに、山形・宮城の社会福祉協議会、行政、NPO等に配布する。 |
| 準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等 | 準備物 ○活動報告書 ○クイズブック「たすけあいのしおり」等 |
| 参加人数 | |
| 経費の総額・内訳概要 | 約1万円（印刷費、資料送付代） |
| 成果と課題 | ※最終報告会にて配布・報告予定 |
| 成果物 | 活動報告書 |

防 災 教 育 チ ャ レ ン ジ プ ラ ン 最 終 報 告 書

【実践プログラム④】

| | |
|-----------------------------|--|
| タイトル | 第3回やまがた市民活動まつりへの参加（資料展示・配布）【予定】 |
| 実施月日（曜日） | 2011年2月27日（日） |
| 実施場所 | 霞城セントラル1階アトリウム |
| 担当者または講師 | 担当者・講師等の区分：参加団体 氏 名：当団体スタッフ4名 所属・役職等： |
| 所要時間または「コマ数×単位時間」 | 2時間 |
| プログラムのカテゴリ、形式 | 1 イベント・行事 |
| 活動目的 | 6 防災に関する知識を深める 8 防災意識を高める |
| 達成目標 | 今回のチャレンジプランでの取り組みや得られた成果について、山形県民に向けて広く周知する。 |
| 実践方法・進め方（箇条書き、またはフロー） | 「たすけあい防災カレッジ」当日の様子や当日資料を展示・配布。 |
| 準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等 | ○活動報告書 ○クイズブック「たすけあいのしおり」他、当日資料 ○当日の様子（写真など） |
| 参加人数 | 延1,000人（昨年度） |
| 経費の総額・内訳概要 | なし |
| 成果と課題 | 山形県民の防災意識向上に向けて、取り組みのPRと、来場者・他参加団体（約30団体）との新たなネットワークの展開を心がけたい。 |
| 成果物 | なし |

防災教育チャレンジプラン 最終報告書

4. 苦勞した点・工夫した点

| | |
|---|---|
| <p>プランの立案 と調整で 苦勞した点 工夫した点</p> | <p>○福祉防災教育プログラムの作成（カレッジ）</p> <p>あまり前例のない取り組みということから、立案に取り組むうちに方向性を見失ってしまったり、どのようなプログラム内容が伝わりやすいか・落としどころをどこにもっていけばいいか、といった具体的なプログラム作成で行き詰ってしまったりした。中間報告会でいただいたアドバイスや、講師陣や協力して下さる方との対話の中で、立て直しを図ることができた。</p> <p>○「宮城・山形連携」の具体化（カレッジ）</p> <p>「宮城県沖地震に向けて、宮城・山形の連携が必要」ということを、より具体的な方法で伝えるにはどうしたら良いか非常に悩んだ。当初は宮城・山形それぞれで開催する予定であったが、その形で「連携」を伝えられるのか？という壁に行き当たった。今回はあえて大きな被災経験のない山形で開催し、宮城から参加者や講師陣をお招きした。宮城県沖地震に向けて大きな危機感をもち備えに取り組む講師陣や、宮城からの参加者、前回の宮城県沖地震で被災した当時小学生の方のお話などを通して、山形の方にとって良い刺激を与えられたと感じている。</p> <p>○開催時期（カレッジ）</p> <p>中間報告会後の調整を経て、また1.17と時期を同じくすることでより高い意識を参加者にもってもらいたいと考え、1月15日に設定した。当日は雪が多く開催時間が遅れてしまい、後のプログラムも押してしまった。また、宮城側で地域防災に取り組む小学生に声掛けを行ったが、この時期は防災のイベントが重なってしまっていた。先を見越した取り組み方が必要であると感じた。</p> |
| <p>準備活動で 苦勞した点 工夫した点</p> | <p>○広報活動</p> <p>これまで大きな被災経験がなく、県民の防災意識も高いとはいえない山形で「防災」をテーマとしたイベントを開催することは、広報活動も困難を極めた。県内社会福祉協議会や山形市教育委員会などにもご協力をいただき、広報活動を行ったが、事前申し込みは非常に少なかった。当日になって、開催規模に見合う人数の方にお越しいただくことはできた。しかし、福祉をテーマとしていることもあり、「本当にこのイベント情報を必要としている方に行き届いたかどうか」という疑問は残る。より効果的な広報のため、広報先の選定・広報のしかたについては、今後もイベントを開催する際の大きな検討課題である。</p> <p>○クイズブック「たすけあいのしおり」作成（カレッジ）</p> <p>講師陣にご協力いただきながら、4つのテーマごとにクイズを作成。参加者がブースを回りながら学んだ内容で、クイズを解いていく形にした。ブースには色鉛筆が設置してあり、クイズを解いたらしおりの「謎の枠」を1つ塗りつぶしていく→最後には「たすけあい」という文字が浮かび上がる、という遊び要素も取り入れた。「楽しく、わかりやすい」と好評をいただいた。</p> |

防災教育チャレンジプラン 最終報告書

実践に 当たって 苦労した点 工夫した点

○「子ども向け」の工夫（カレッジ）

伝えたい内容をどの程度まで詰めるかということや、当日の説明の仕方、会場の使い方など、子どもが飽きない工夫が必要。

○時間調整（カレッジ）

当日大雪が降ってしまい、開催時間が遅れたことと、プログラムの最中に時間が押した際にどのように調整するかが困難であった。参加者からも「ブースを回る時間が倍ぐらいほしかった」との声を数件いただいている。プログラム内容も、趣旨に絞って当初よりシンプルにしたが、開催時間に対しては詰め込み過ぎてしまった。今後のプログラム応用にあたっての課題としていきたい。

○会場選定について

トークサロンについては、会場が山形市隣の天童市であったことから（車で30分）、「山形市内であれば行きたかった」との声をいただいた。また、たすけあい防災カレッジについては飲食禁止の会場であり、試食等ができずにプログラムの幅も狭くなってしまった。しかし、立地はよく、福祉センター利用者が会場を覗いてくださったことも多かった。会場選定にあたってのチェック項目、プラス面・マイナス面をあらかじめしっかり把握しておくことが大切である。

防 災 教 育 チ ャ レ ン ジ フ ラ ン 最 終 報 告 書

5. 他の団体、地域との連携

| 協力・連携先の分類 | 団体名、組織名 | 協力・連携の内容 |
|-----------------------------|-----------------------------------|---------------------------------|
| 学校・教育関係・ 同窓会組織 | 山形県教育委員会 | 広報にあたり、山形市教育委員会をご紹介いただく（カレッジ） |
| | 山形市教育委員会 山形市立第十小学校 山形市立西小学校 | 市内小学校へのチラシ配布のご協力（カレッジ） |
| | 山形大学高等教育研究企画センター | 大学生ボランティアをご紹介いただく（カレッジ） |
| 保護者・ PTAの組織 | なし | |
| 地域組織 | なし | |
| 国・地方公共団体・ 公共施設 | （社福）山形市社会福祉協議会 | カレッジ共催団体として、会場の提供や広報のアドバイス等いただく |
| | （社福）山形県社会福祉協議会 | 会場選定・広報活動のご協力（主にトークサロン） |
| | （社福）天童市社会福祉協議会 | 会場提供・広報活動のご協力（トークサロン） |
| | 山形県生活環境部 危機管理・くらし安心局危機管理課 | プログラム立案における情報提供・当日視察（カレッジ） |
| | 山形市総務部防災安全課 | 広報のご相談（カレッジ） |
| | 山形県障がい者スポーツ協会 | カレッジ講師（高齢者） |
| | 山形市市民活動支援センター | チラシ・資料印刷、会議室利用、その他取り組みに関する相談全般 |
| 企業・ 産業関連の組合等 | （有）ヘルシーハット | カレッジ講師（アレルギー） |
| | 河北新報社 | カレッジ広報 |
| ボランティア団体・ NPO法人・NGO 等 | （特活）のびのび会 ワークポケット | トークサロン講師 |
| | （特活）ドリーム・ゲート | カレッジ講師（障がい者）、プログラム作成全般のご相談 |
| | （特活）エークューブ | カレッジ講師（ペット） |
| | （特活）災害救助犬ネットワーク | カレッジ講師 |
| | （特活）にいがた災害ボランティアネットワーク | カレッジ講師（たすけあいゲーム） |
| | （特活）アレルギー支援ネットワーク | カレッジ資料提供（アレルギー） |
| 職業、職能団体・ 学術組織、学会等 | （特活）山形の公益活動を応援する会・アミル | 主に広報に関するご相談 |
| | なし | |

防災教育チャレンジプラン 最終報告書

6. 成果と課題（実践したプラン全般について）

成果として 得たこと

○福祉防災教育プログラム・教材の開発・実施

たすけあい防災カレッジの講師陣をはじめ、様々な方のご協力を得ながら、プログラムとしてまとめ、教材を作成することができた。今後も改良を加えながら、より効果的かつ実践的な内容へとステップアップを図りつつ、様々な方に向けて活用していきたい。

○多様な機関・団体との連携、つながりの構築

この1年間の取り組みを通して、宮城・山形両県の社会福祉協議会、行政、NPOなど、多様な機関・団体との関わり・つながりを作ることができた。今後へ向けて、より具体的な連携体制の構築をはかりたい。

○山形県内における、宮城県沖地震についての普及・啓発

たすけあい防災カレッジの開催によって、山形の方々に「宮城県沖地震」を知ってもらうことができた。自らが被災する可能性と、より被害想定の大い宮城に対してできることを考えていってほしい、ということ、今後も伝えていきたい。

○コミュニケーションが大切であることの再確認

子どもたちにとっては、災害時に手助けが必要な当事者に対し、手助けの方法を知っていることも大切であるが、当事者や周囲の大人とコミュニケーションをとることがまず大切である。当事者にとっても、周囲と積極的に関わっていくことがコミュニケーションをより円滑にする。コミュニケーション力が低下しているといわれる現代、その力を育てることが人と人とのつながりを生み、共助の力を育て、地域防災にもつながっていく。このことは、クリスマストークサロン講師や、たすけあい防災カレッジにおいてブースを担当してくださった各講師陣からも挙がっている。

○当事者やその支援者が声をあげる、地域に関わることの大切さ

子どもたちが当事者を「特別な人」としてとらえてしまうことのないよう、直接的・同目線の関わりのお機会をつくるのが大切である。たすけあいぼうさいカレッジの参加者アンケートからも、その効果を読み取ることができる。当事者を「助けられる存在」としてみるだけでなく、互いにできることは補い合う。子どもたちも含め、「助けられる人」から、「助け合える関係」の構築をはかりたい。

防災教育チャレンジプラン 最終報告書

| | |
|---------------------------|---|
| <p>全体の反省・感想・課題</p> | <p>○福祉のまちづくり＝災害にも強いまちづくり</p> <p>講師陣や参加者との関わりの中から、日常の延長線上が災害時であり、災害時は平常時の課題が表面化すること・普段の生活で困りごとを抱えている方は、災害時の避難や避難生活において、より深刻な問題を抱えること・普段問題なく生活している方でも、災害により生活が一変し、問題を抱えてしまう可能性もあることを考えた。平常時から福祉のまちづくりを進めることが、災害時要援護者だけでなく、より多くの方の生活を救うことにつながる。福祉のまちづくりには、普段からの人と人とのつながりや、助け合いの心が大切である。このことを参加者に伝えるだけでなく、私たちスタッフも今回の取り組みを通して、より深く考え、実感することができた。</p> <p>○思いと実務のバランス</p> <p>事業の方向性について、何を・何のために・どのように伝えるかという思いと、期限や対外的調整などの実務のバランスを、うまくとることができなかった。特に対外的な関わりについては、組織内での打ち合わせを重ね、基盤を固めた上でやりとりしていく必要がある。</p> |
| <p>今後の継続予定</p> | <p>○今回のプログラムの応用・発展・継続</p> <p>トークサロンも、福祉防災教育プログラムも、今回の取り組みで終わりにするのではなく、地域性・実用性・学習効果などを考慮しながら、今後応用・発展させて展開していきたい。</p> <p>○宮城での開催</p> <p>たすけあい防災カレッジの開催にあたって、当初は宮城と山形で1回ずつの開催を予定していたが、山形で1回の開催となった。より効果的な形を追及した結果ではあるが、来年度以降、ぜひ宮城でも開催したい。</p> <p>○つながりの構築・継続</p> <p>今回関わってくださった、山形・宮城両県の講師陣・協力団体等との関わりが、事業の終了とともに切れることのないよう、情報交換、勉強会の開催、教材の共同開発、新たなつながりの構築など、今後のより具体的な関係性につなげていきたい。</p> |

防災教育チャレンジラン 最終報告書

7. 自由記述欄 ①

【たすけあい防災カレッジ～せまる宮城県沖地震！「共助」のパワーでのりこえよう！】

当日の様子

① 【自助】地震について知ろう（30分）

- ・地震の起こるしくみ
- ・宮城県沖地震について



② 【共助】災害発生！皆で助け合おう（100分）

- ・「共助」とは？
- ・ブース毎全体ガイダンス



防災教育チャレンジプラン 最終報告書

7. 自由記述欄 ②

・ブースラリー：障がい者、高齢者、アレルギー、ペットの4ブースを設置。ブースを回り、資料やお話、体験学習を通して知識をつけ、クイズブック「たすけあいのしおり」を解いていく。



・たすけあいゲーム：グループ毎に配られた飴。人数と個数が合わない、さあどうする？



③ 災害救助犬デモンストレーション（30分）

災害救助犬の取り組みを紹介、災害時における多様な支援方法を伝える



防災教育チャレンジプラン 最終報告書

7. 自由記述欄 ③

【新聞掲載記事】

備える 隣県同士 助け合い学ぼう 15日・山形で防災教室

山形県と宮城県の小中学生を主な対象とした防災教室「たすけあい防災カレッジ」が15日、山形市総合福祉センター体育ホールで開かれる。山形県では近年、目立った地震活動はないが、1978年の宮城県沖地震では新庄で震度5（当時の基準）が観測された。隣県同士の小中学生の交流を通じ、災害に強い地域社会の構築を目指す。

災害ボランティアネットワークや防災研修を手掛けるNPO法人「ディー・コレクティブ」（天童市）が企画。山形市社会福祉協議会との共催で、障害者福祉やベットの支援などの運動に取り組む団体も協力する。

対象は主に小学5、6年生。コレクティブの千川原公彦代表理事（39）が近い将来の宮城県沖地震で予想される被害や、2008年の岩手・宮城内陸地震での経験などを紹介。障害者や高齢者など災害時に周囲の協力が必要な人についてNPOや企業の関係者が説明し、参加者がクイズやゲーム形式で学ぶ。

千川原代表理事は「普段から近所付き合いや要援護者の見守りができている地域は災害にも強い。社会には多様な人が暮らしていることを子どもたちに学んでもらい、県境を超えて災害時の助け合いの輪を広げていきたい」と話している。

午後1時～4時半。参加無料で、申し込みが必要。連絡先はディー・コレクティブ山形デスク0800-1881-6000。

2011年1月13日
河北新報朝刊

2011年1月16日
河北新報朝刊

3日（火曜日） 地域 151 153 154

災害時助け合おう
山形小中学生の防災カレッジ

災害時に周囲の人と助け合おう「共助」に関する知識を子どもたちにも身に付けてもらおうという「たすけあい防災カレッジ」が15日、山形市総合福祉センターで開かれ、小中学生とその家族ら約40人が参加。会場には仙台市の団体などが▽障害者▽高齢者▽食物アレルギー▽ベットの四つのフーズを作り、被災時に困ることも気遣ってほしいことを紹介した。障害者が上着の着替えの手伝いを体験。担当者は「被災時は誰でも不安になる。障害者を見つけたら話し掛けて仲良く着替えの手伝いを体験する小学生」山形市総合福祉センター



2011年1月18日
山形新聞朝刊

備える 宮城沖大地震 防災の心構え 県境超え学ぼう 宮城の児童参加 山形でカレッジ

近い将来の宮城県沖地震を想定し、山形、宮城両県の小中学生らが防災への心構えを養う「たすけあい防災カレッジ」が15日、山形市総合福祉センターであった。

災害ボランティア育成などに取り組む天童市のNPO法人「ディー・コレクティブ」の主催で、小学生や保護者ら30人が参加。各地のNPO関係者が講師を務めた。名取市のNPO法人「ドリーム・ゲート」の藤本和敏さん（41）は身体障害のある人を捜索する災害救助犬の模擬訓練も披露され、指示に従う様子に子どもたちは感心しきりだった。

「伝いをする子どもたちが被災者の励ましになる場合もある。まずは災害に対して関心を持ってほしい」と語り、山形十小6年の佐藤花南さん（12）は「災害に備え、普段から非常食などを準備しよう」と話し、食物アレルギーについて「食べても調へたい」と話した。

